

令和3年3月11日発行 春燈/第76巻第3号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

2021 March

3月号

# 春燈



## 安住敦の句

### 阿部洋子豆撒いて鬼を驚かす

『午前午後』昭和四十七年

新派の看板女優・阿部洋子は、二月三日赤坂豊川稲荷の節分会に招かれる。沢山の芸能人や赤坂の芸芸有衆等華やかな年男、年女の中、袴をつけた洋子の美しさは際立ち、新派の「滝の白糸」の舞台かと錯覚する程。その姿は水も滴る良い女振り、これでは鬼は逃げないと敦先生の注釈もある。彼女は春燈の同人で、先生の思いもことの他強かった。

豊谷青峰

## 安住敦の句

### 漬けるまでの白菜の高厨占む

『午前午後』昭和四十七年

厨に所狭しと置かれてある真っ白な白菜はどれも見事だ。ずっしりとした存在感が窺われる。

〈漬けるまでの〉と時間を限定し、これから始まる白菜漬けの様子が目に浮かぶ。白菜を干し漬樽を洗う家人の忙しい足音が聞こえてくるのも間もないことであろう。

些細な身辺の風景を詠い、そのうしろに生身の人間の息遣いが感じられる一句である。

大西由美子

安立公彦

歩み来し道やそれぞれ初明り

住み古りし家居に馴染む鏡餅

鏡餅とほき日の母思ひをり

幼児のこゑのまろさや初電話

ペンを手に暫し見入るや初日記



燈下集

○ 松本峰春

マスク外すやいつもの声のつややかに

風邪の所為と我儘をいふ身勝手さ

冬空に飛行機の飛ぶそれは紙

赤い服好む漢や息白し

海近くなりたる流れ春兆す

○ 木村傘休

ドロップ缶揺れば音する開戦日

極月や眼鏡に増ゆる掠り傷

夕闇の一所明るし千葉笑

裏メニューの蕎麦屋の餅入りおじやかな

寒に入る臨時ニュースのまた流れ

○ 加藤良子

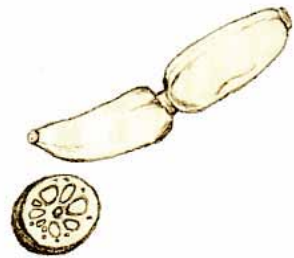
鶴一羽折りて初富士仰ぎけり

恒例の先祖参りや初御空

おだやかな令和の御代のお正月

年迎ふ卒寿の年を大切に

老いては子に従ふが良し初日記



○ 鈴木鳳来

大根干す御油の宿場の松並木

旅の夜の人肌恋し虎落笛

なんとなく生きて卒寿の柚子湯かな

歳晩や木曾の国より五平餅

綿虫の綿を欲しがる奪衣婆

○ 鈴木静恵

冬菊の残んの紅を瓶に挿す  
友の名の誌上に見えぬ寒さかな  
煮凝や垣より覗く猫の貌  
東京は生まれ故郷や冬木の芽  
一刀彫の巡礼人形春を待つ

○ 鈴木直充

枯野よりこゑ湧きあがる日照雨かな  
吹越や落葉山の遠こだま  
太陽の凍つてゐたる奥秩父  
ふくろふや箱階段の黒びかり  
冬銀河あふぐ吾はも宇宙の塵

○ 近藤牧男

ここからは寝てゆくつもり暖房車  
工事場の音の上にも雪降り来  
爛酒や養生語録耳に溜め  
悔い残る脱ぐ冬帽のへこみほど  
盃に花鳥のあそぶ二日かな

○ 吉澤恵美子

人さし指のかすかに曲がる十二月  
探してゐる本の見つかる師走かな  
厚切の大根煮ゆる匂ひかな  
ごまめ煮る一匹二匹と味見して  
雪の駅急行通過の指呼の指

○ 卜部黎子

柚湯して十指一本づつほぐす  
街師走監視カメラの視野の中  
晩年の予期せぬ蟄居葛湯とく  
七巡のわが干支惜しむ初暦  
葉牡丹の風の巻き込む非日常

○ 卯木莞子

御握りもカステラも好き冬雀  
拙なさを恥づるCD枯芙蓉  
読み取れぬ運命線を手袋へ  
気安さの百円ショップ日記買ふ  
蒲柳には安堵のマスクLサイズ

○ 深川敏子

大雪や「お帰りなさい」はやぶさ2  
カピバラの目を細めたる柚湯かな  
人間の嫌ひな猫と日向ぼこ  
注文のおでんの袋何つむる  
高尾山よく見ゆる日や賀状書く

○ 大室恵美子

初詣社の鈴なき静けさよ(コトナ橋にて)  
願ひごと一つにしぼり初詣  
御慶交せる友多きレジデンス  
変はりゆく世に追ひつけずごまめ嚙む  
おだやかな日和たまはる三ヶ日

○ 尾野奈津子

大仰な手締め熊手畏まる  
一息に大根の首切り落とす  
来し方の話はづむや夜の炬燵  
「先行き吉」の神籤信じて年の暮  
絵蠟燭の終のまたたき年惜しむ

○ 小嶋恵美

年の瀬や昭和の湯気と杵の音  
寒鯉のこゑなき口や空の青  
寒いねと命確かむ電話かな  
マスクして片仮名文字の意味問はず  
埋火や眼指遠き老学者

○ 三宅文子

冬服の凜と消防音楽隊(消防会館)  
凧や風の教へる火の始末  
火事の夜はどこかあやしき匂ひ持つ  
我町は九番纏石路咲いて  
寒梅やをんなが惚れる纏持

○ 太田慶子

組み立つるロボットに貌つく小春  
十二月ひと日とつとと昏れてゐる  
つかつかと座敷の奥へ冬至の日  
冬うらら運慶仏の歩きさう  
手袋の片手落としてよりの運

○ 青柳雅子

冬靄の中よりぬつと妙義山  
波がしら岩に崩るる寒さかな  
ちかごろの鏝は犬日向ぼこ  
寄鍋の奉行は夫がつかさどる  
ナイス・ガイと呼ばれし人のちゃんちゃんこ

○ 木多芙美子

愛はさまざま冬木はや芽を育て  
霜柱踏みて左脳を目覚めさす  
嘘少しポインセチアの赤と白  
いつよりか腕を組む癖夕笹子  
煤逃といへど行くあてなかりけり

○ 小張志げ

ねんねこの背の鼓動の安らかに  
手袋の失せたる後の片手憂し  
埋火や昨夜の悔いのただ一つ  
侘助一輪日差し一条わび住ひ  
鏡の中は誰なのかしら雪女

○ 江草 礼

年用意メモ数行の男文字  
片仮名の報道ばかり去年今年  
朝刊につつむ下仁田葱の味  
赤ワイン一人聴くW H A M霜夜かな  
蒼天を彫るかに冬木一列に

○ 岩永はるみ

師の墓碑に朝の日差しや冬雀(成瀬桃生先生)  
着ぶくれて猫と木椅子を分かちけり  
帰り花きのふの人とすれ違ふ  
鯛焼の尾の好きな子も二十かな  
青年の眸もて雪嶺仰ぎけり(祝・田中嘉信さん)

○ 林 紀夫

蓬萊や信濃に吹ける風や嘉し(祝・春燈賞嘉信さん)  
新玉の年敵かに明けにけり  
元朝や金粉入りの吟醸酒  
静かなる相模の海や初景色  
人日の惰眠貧る臥龍かな

○ 中野さき江

冴ゆる夜の一語いさかふ火種かな  
山茶花や身を重ねつつ散りてなほ  
ごつごつの柚子ふんだんの湯や五体  
小倉山鐘は雪呼ぶ二尊院  
冬の星訣れの数をふやしけり(憧)

○ 栗原完爾

剪りくるる蠟梅一枝書道塾  
極月や壁に目を剝く閻魔像  
古曆すぐには捨てず巻きてけり  
雲裂いて日の落ちくるや年の果  
マスクして越ゆる一年寅彦忌

○ 本多遊方

実南天難を転ずと啄めよ  
古卒塔婆お焚上げして去年の月  
諸法無我諸行無常や初日影  
室の花愛でナチュラリストを自称  
炬燵にて箱根駅伝応援す

○ 武田巨子

香りごと太き湯気立つ冬至風呂  
枯蓮の治むる池の静寂かな  
霜の花無垢の光を放ちけり  
霧水界突き進みゆくロープウエー  
街頭にハンドベル聞く聖夜かな

○ 諸岡孝子

数へ日やたつぷりとつぐ後の炭  
茶会記の夢の一文筆始  
炭に火のまはりくる音初水屋  
己が影と同行二人葱坊主  
日高川怨み候と蛇出づる

○ 小泉三枝

昼月の渡る速さや年の暮  
お歳暮は「リュウグウ」よりの玉手箱  
初鶏の長鳴き天の岩戸開く  
筆太に晴と書き入れ初曆  
初夢の仲よき父母でありにけり

# 余言 安立公彦

茜差す豊旗雲や初筑波

松橋 利雄

「豊旗雲」は、「旗のように靡いている美しい雲」。上五中七だけで、「初筑波」の山容が浮かんでくる。この初筑波は、初富士とともに、山容の初景色の世界を、みごとに具現していると言って善いだらう。筑波山は標高八七七メートル、富士山の四割にも及ばないが、その歴史と、人びとに与える信仰の思いは深い。まさに「初筑波」だ。この句、「豊旗雲」が善く効いている。「初筑波」の史実と併せて、目の辺りに仰ぐ思いである。

枯野行く何も思はず考へず

橘 正義

「枯野」という言葉には、日本文学の歴史があると言つて善い。古典の文献にも登場しているのは、歳時記を見ても分かる。「蕭条」という言葉がある。まさに枯野にこそふさわしい。この句の世界も満目蕭条である。

今作者はその枯野を歩いている。枯野も昔と異なり、規

人びとの集りの伝統を想像しながら、彼方に点る町の灯を見守る作者の思いが、善く出ている。

マスクして片仮名文字の意味問はず

小嶋 恵美

「片仮名語」は、外来語。中に日本で外来語を模して作られた語にも言う。最近ことに外来語の使用された文書が多くなった。それは俳句についても同じ。私たちの春燈誌でもそのことは例外ではない。一つの言葉がその国に馴染み、やがてその国の人々の会話に、また書誌に普通に見受けられるようになるには、年数が要だ。

片仮名語を、十七文字を構成する一つの言葉として使用する場合、その必要性を十分に吟味してからに為すべきだ。この句にも作者のそういう思いが充分に出ている。

青年の眸もて雪嶺仰ぎけり (視・田中嘉信さん) 岩永はるみ

蓬菜や信濃に吹ける風や嘉し (祝春燈掌嘉信さん) 林 紀夫

「春燈」一月号に記載の通り、第四十九回春燈賞は、田中嘉信氏に決まった。氏は現在七十七歳、長野に生を受け、現住所は神奈川県川崎市。

一句目、氏の故郷長野には雪嶺も多かろう。雪嶺を仰ぐのは、冬に入ると毎日の所作とも言える。この句、「青年の眸もて」が善い。この「眸」は、「こころの青年」にも

模はさして広くはなからう。しかし「枯野」と言う言葉は作者の心に通う。「何も思はず考へず」は、むしろきつぱりとしている。「考へず」の奥に、深い「思惟」を思う。

とし問へば手袋の五指ひらきけり 三上 程子

愛らしい童女の姿が浮かぶ。「年間へば」でなく、「とし問へば」の上五にも、その童女の姿が浮かんでくる。更に「手袋の五指」が善い。彩りのある手袋だらう。

その童女の前に腰をかめた作者が、「おとしはいくつ」と問うと、その童女は、「いつつ」と指を開く。手袋のままのもの、五歳児に相応しい。この句を見ていると、俳句というものが、如何に生活に密着しているかを知ることが出来る。作者の俳句は、対象が広々としている。

夕闇の一所明るし千葉笑

木村 傘休

「千葉笑」は、千葉市中央区のせんちゆう千葉寺で、江戸期から行われた習俗。大晦日の夜人々が集まり、顔を隠し頭を包み、声を変えて、奉行や庄屋らの善悪を言いたて、大いに笑い褒貶した、と辞書は記す。千葉寺は七〇九年、行基により創建され、千葉笑は現在も保存会の許、催されている。

「夕闇の一所明るし」には、そういう集落の年に一度の

通う。その思いを以て、春燈同人としての尽力を願う、という思いの句と言える。田中氏は現在編集部の一員として精進の日々である。

二句目、「蓬菜」は新年の祝儀など慶賀の飾り。氏の出生地は先述の通り信濃。信濃は文芸の里でもある。新春の信濃、吹く風は信州の大地をつつみ、千曲川に沿い、浅間山を際立てる。「風や善し」を、「風や嘉し」としてあるのも、「嘉信」の一字への挨拶であると言えよう。

八手咲く女庭訓身に添はず 小倉 陶女

「女庭訓」とは聞きなれない言葉だ。辞書に当たると、江戸時代の婦女子の修養書、「女重宝記」、「女四書」などとある。作者の勉強ぶりが解かる一句だ。三百年に及ぶ時代差感覚は、身に添わないことも多かろう。「八手」が活きている。しかし作者の向学の思いは貴重だ。

父の演歌幻に聴く枯野かな 宮田 豊子

「演歌」、懐かしい呼び名である。作者は今、枯野を歩きながら、少女の頃佳く聴いた父親の演歌を思い出している。「幻に聴く」が、「父の演歌」を実在化している。

戦前から戦後にかけての歌か。「枯野」という茫漠とした言葉が、作者の思いに善く添っている。

# 当月集

安立 公彦選



○ 向井芳子

雑炊に卵ひとつや一葉忌  
色変へて冬深みゆく雑木山  
風を待つ丘の風車や寒早  
雲間より日矢もれ来たる聖誕祭  
天空の寺の石仏風花す

○ 山口地翠

○ 佐藤まさ子  
冬紅葉朝日眩しき狭庭かな  
理科室にビーカー並ぶ冬休み  
中庭に残る一輪冬薔薇  
風花や薪割る音の奥信濃  
大家族集まる家や大晦日

○ 農野憲一郎

○ 横山さくら

風待ちの巨大風車や冬銀河  
鯛買うて帰るも仕事納かな  
弟に父の声聞く初電話  
松飾恵方の風を絡め取る  
夕陽なか灯台点すお元日

善き年と願ひも乗する初電車  
一枚に思ひを込むる年賀状  
ため息か含み笑ひか初鏡  
散歩道少し延ばすや日脚伸ぶ  
実の数を数へて触るる梅三分

# 春燈の句

安立 公彦選



去年今年山の小駅の小座布団

宮城 澤田 明子

寒菊や手に梳きやすき柘植の櫛

どの人も懐かしきかな賀状書く

ゆるやかに日を返しぬる冬の川  
山城へつづく路傍の枯葎

湯けむりのなかや蔵王のスキー宿

広島 落久保万里

人住まぬ家またふゆる実南天  
堰落つる水音細き十二月

忘れめや夫火葬の日の雪景色

雪降る日夫の遺骨の白かりき

子等帰り独りになりぬ冬の暮

揃ひの皿見るも哀しや凍厨

冷えきつて朝刊指を滑り落つ

大円に水鳥あまた余呉の湖

鮫鱈や値札貼らるる白き腹

山眠る籠を移動販売車

寒菊は健気や黄色あざやかに

来し方の不平不満や古日記

捨て切れぬ禁煙パイプ年の暮  
独り居の小窓飾るや室の花

大阪 柿原よし子

岐阜 高井 修一

京都 西村 洋平

京都 大槻 祐二

兵庫 鬼頭 博

山梨 川井真理子